

『信無くんば立たず』

かんだ けんいち
神田 健一

新日本製鐵大分労働組合・組合長

最近、信頼という言葉が妙に気にかかる。昨年3月11日の東日本大震災以降、あらゆる分野において変革が求められ、その実効ある取り組みに向けた論戦が行われているからか。

「民信無くんば立たず」・・・社会は政治への信頼なくして成り立つものではない。孔子が、政治を行なう上で大切なものとして、軍備・食生活・民衆の信頼の三つを掲げ、中でも重要なのが「信頼」であると説いたといわれている。

東日本大震災、福島第一原発事故の発生は、多くの尊い命と大切な故郷をも奪い去っていった。発生から1年になろうとする今、復旧・復興に向けた槌音が聞こえてはきたが、その取り組みは緒に就いたばかりである。

他方、福島第一原発事故の発生によるエネルギー問題は、わが国の経済・社会のありように大きな課題を投げかけている。将来的には再生可能エネルギーが原発に代わって、その全てを賄うようになることを望まない者はいないだろう。しかし、「時間軸をどこにおき、費用捻出をどう考え、将来を見据えた温暖化対策の関わりをどのように進めていくのか」など、現実問題に対する真正面からの議論は見えてこない。

方や、地球環境や効率的・安定的な電力供給を考えれば、原子力が当面の重要な発電方式であることは間違いない。しかし、目に見えぬ放射線の脅威は、原発事故発生以降、日々増幅していることも事実である。それだけに、「安心と信頼」を如何に国民の目に見える形で証明していくのか、これもまた地に足付けた議論がなくてはならない。

「民信無くんば立たず」、政治家が、政局のみを論じ、我が身の保身に走り、次の選挙の当選だけを考えている「政治家」の集まりなら展望は開けない。わが国の経済・社会の持続的発展とそのもとにおける雇用と生活の安心・安定のための政治の舵取りを信じたい。

翻って、わが労働運動や如何に。事の本質を見誤らず、地に足付けて、組合員の信頼に足り得る活動を進めているだろうか、その重要な取り組みの一つである春季取り組みが始まった。基幹労連のAP（アクティブプラン）12春季取り組みのスローガンは『明日をひらく！』。震災復興、産業空洞化防止に向けた産業政策領域と内需低迷への対応など国内経済活性化に資する労働政策領域をパッケージで取り組むとしている。

厳しい時代環境にあっても好循環の理念は不変。職場活力と企業発展の好循環、ものづくり産業・企業の正念場の年として、労使が互いの立ち位置を尊重し、徹底した議論と確実な前進を願ってやまない。

信頼とは、『信じて頼りにすること。頼りになると信じること。また、その気持ち。言は、言明（はっきりいう）の意。信は「人+言」で、一度言明したことを押し通す人間の行為をあらわす。途中で屈することなく、まっすぐ進む事。』と辞書にある。

先達が築いた労使信頼関係のもとで、今次交渉を通じ、職場に、社会に『信頼』される企業労使であり続けたい。